

主日礼拝説教「キリストにとどまるなら」

日本基督教団石神井教会 2018年4月29日

【旧約聖書日課】出エジプト記 19章1～6節

¹イスラエルの人々は、エジプトの国を出て三月目のその日に、シナイの荒れ野に到着した。²彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。

³モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。

「ヤコブの家にこのように語り、イスラエルの人々に告げなさい。

⁴あなたたちは見た

わたしがエジプト人にしたこと

また、あなたたちを鷲の翼に乗せて

わたしのもとに連れて来たことを。

⁵今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば

あなたたちはすべての民の間であって

わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。

⁶あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。

これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

【使徒書日課】ペトロの手紙一 2章1～10節

¹だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、²生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。³あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました。⁴この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。⁵あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。⁶聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

⁷従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」

のであり、⁸また、

「つまずきの石、妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

⁹しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のもとになった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。¹⁰あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」

のです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章1～11節

1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。3わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。4わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。5わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。10わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

11これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

今日の福音書日課は、とても有名なぶどうの木のたとえです。イエスさまは、ご自身を「わたしはまことのぶどうの木」と言われました。聖書に出てくる植物では、ぶどうはとてもメジャーな植物です。教会では、聖餐式でパンとぶどう酒をいただきますし、ぶどうの木の聖句は小さい子どもたちにもわかりやすい箇所として語られることも多く、親しんでおられる方々も多いことかと思えます。イエスさまはまことのぶどうの木、私たちはその木につながっている枝、そして、父なる神はぶどうの木を手入れする農夫のような存在。視覚的なたとえで大変わかりやすいところです。ぶどうの木につながっていないければ、枝は実を結ぶことができず、木につながっていない実らない枝は、農夫によって剪定され、なげすてられてしまう。イエスさまと自分の関係とは、木につながっていないければ実を实らすことのないぶどうの枝のような関係で、イエスさまと繋がっていれば豊かな実り多い人生を送ることができる、そのようにとらえると、大変わかりやすいと思います。自分とイエスさま、ほかの人とイエスさま、それぞれの人が枝分かれして、どこかで大木のようなイエスさまと繋がっている安心感。イエスさまとの個人的な内面的なつながり、イエスさまとの霊的なつながりを大切に教えられています。

旧約聖書では、ぶどうの木といえば、イスラエルの民をあらわす時にたとえられます。ぶどう畑という表現も使われ、個人的なことよりは、イスラエルの民の全体的なこととして言い表されます。神さまと自分という閉ざされた内面的な関係というより、むしろ神と、神の民・イスラエルの関係としてぶどう畑のたとえが用いられます。出エジプト記19章では、神はモーセに「あなたたちはすべての民の間であって／わたしの宝となる」と言わ

れました。神の宝とされたイスラエルの民は、聖なる国民であり、祭司であると。イスラエル全体が、この世で祭司として、世界のすべての人々と、神をつなぐ仲介者の役を担うのだと神は言われました。19章は、十戒が授与される20章の直前の部分で、いよいよシナイ山で十戒が与えられるその三日前の出来事です。エジプトから逃げてきたイスラエルの民がシナイの荒れ野に到着し、そこに宿営した、十戒授与の物語の初めの部分にあたります。十戒を受けるに先立って、神はイスラエルをご自分の宝としてエジプトの奴隷から救い出してくださったことをモーセを通して語られました。十戒を守ることによって神との新しい関係に入れられるのだと。律法を守ることによって、イスラエルは神の宝とされ、祭司の役割を与えられ、神の聖なる国民となると神は言われました。エジプトで虐げられていたイスラエルの民は、十戒を通して、新しいイスラエルとされ、十戒によって、それまでのエジプトの奴隷ではなく、神の民、神の宝として、新たにされました。

律法授与というと、モーセ物語を知らない人は、厳しい掟の押し付けのように感じられるかもしれません。出エジプト記20章の十戒、何々をしてはならないという掟だけを見れば、なぜ神はそんな一方的な締め付けをするのだろうかと思う方もあることでしょう。十戒は20章2節の部分「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」、この言葉が前文にあたります。この前文にあるように、神はイスラエルの主であって、神がエジプトからイスラエルを救ってくださったということが、十戒の大前提にあります。エジプトの奴隷状態にあったけれども、エジプトがイスラエルの主ではない。神がまことの主です。まず、神がイスラエルを選んでくださった。その選びがあって、神の愛と憐れによって、その虐げられているところから救い出されたのです。十戒が、神からの一方的な押し付けならば、このような前文は必要ないでしょう。モーセが率いてきた人々が、エジプトからの脱出は自分たちの力でなしたのではなく、リーダーであるモーセがなしたのでもなく、まず神の選びがあったから救われたと告白するために、この前文があります。この律法は、エジプトとなんら変わらない一方的な厳しい締め付けや搾取ではなく、十戒の前文にあるように、神の一方的な選びと召しが大前提です。

このことを、神はあらかじめモーセを通して人々に語られたのが19章でした。「わたしの契約を守るならば」と神は言われます。これからシナイ山で授ける十の戒めを守るならば、あなたたちはわたしの宝になる。そして、この世の人々の間に立って、神と人をつなぐ祭司へと召し出してくださいました。イスラエルはこの律法を通して、世界の国々と神をつなぐ祭司として立てられ、イスラエルは祭司の王国となると神は約束されました。そしてのちに、主イエスも、このイスラエルの中から神と人々をつなぐ存在として、お生まれになりました。

ユダヤ教の人たちは、エジプト脱出から49日目に十戒が与えられたことから、十戒の授与を「七週の祭り」として記念し祝ってきました。出エジプトから49日たった七週の祭りということで、新約時代、ギリシャ語を話すユダヤ人たちの間では、これを五旬祭、ペンテコステと呼んで、ひとところに集まって祝っていました。主イエスさまが十字架で亡くなられた年の、まさに七週の祭りの時、「突然激しい風が吹いて来るような音が天か

ら聞こえ」と記されている聖霊降臨が起こったことは、使徒言行録二章にかいてあるとおりです。わたしたちクリスチャンは、七週の祭りの時に、聖霊がくださったことを、そのままの呼び方を踏襲して、ペンテコステと呼んで祝います。七週の祭りは、モーセを通してイスラエルに律法が与えられたことを祝う祭でした。そして、新約の時代になって、その祭りのさなかに、イエスさまを通してイスラエルに聖霊が与えられたのが、ペンテコステです。律法を通して祭司とされたイスラエルの民、神の言葉をこの世に伝える祭とされた新しいイスラエルは、主イエスの時代に、聖霊によって、教会を造り上げる言葉を語る新しい神の民とされました。

今日の福音書日課、ぶどうの木のたとえでは、「わたしにつながっていなさい」という言葉がたくさん出てくることに気が付かれると思います。つながっているとは、直訳すると「わたしの中にいつづけなさい」ということです。離れずにとどまり続けることが大切だと主イエスは繰り返しおっしゃいます。けれども、それは、十戒の前文と同様に、すでに主イエスにつながられていることが大前提なのです。私たちが、イエスさまにしがみついているから、良い実を实らすことができるわけではありません。今日の続きの箇所、ヨハネによる福音書 15 章 16 節に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」とあります。私たちが主イエスに従おうと思う前から、主イエスがわたしたちを選び、召し出してくださった。私たちの、いつ心変わりするか分からないような弱い信仰の決心よりも先に、神が先行して私たちをとらえ救おうとしてくださっているのです。

この恵みに、わたしたちはどう応えていったらよいか。旧約の民が、与えられた十戒にしたがい、守り通してきたように、私たちはどのように神の選びと召しに応答していったらいいのでしょうか。主イエスさまは言われます「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」。16 章 17 節にはそう記されています。神の選びに生きていくには、私たち人間がお互いに愛し合うことなのです。なぜなら、神の選びの根底にあるのが、神の愛だからです。聖書の神は、愛の神だから、ご自分の選んだすべての枝の世話をし、ふさわしい時期がくれば選定し、次の季節には実るようにと枝を調べ、祝してくださいます。

私たちは、主イエスさまを通して、神の愛という栄養をいただき、豊かな実りを結ぶぶどうの枝として、互いに愛し合いつつ、主の教会を造り上げていくのです。